



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	工業集積地域における児童・生徒の生活と親の意識：終章 児童・生徒と親の生活・意識
Author(s)	小内, 透; 古久保, さくら; 小野寺, 理佳 他
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 17, 95-100
Issue Date	1999-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22634
Type	departmental bulletin paper
File Information	17_P95-100.pdf



終章 児童・生徒と親の生活・意識

これまで、調査結果にもとづいて、児童・生徒の生活・意識と親の意識の特徴を検討してきた。その結果、児童・生徒と親の生活や意識には、全体に共通する側面と子どもの学年、性別、親の階層によって異なる側面があることが明らかになった。そこで、最後に、児童・生徒と親の生活・意識の諸領域に即して、本稿で明らかになった点を整理し、それをふまえて若干の問題提起をすることによって、本報告書のまとめとする。

I. まず、児童・生徒の社会経済的背景は学年、性別を問わず、大きく異なっていた。一方の極に世帯年収の高い不安定経営・管理層、安定的経営・管理層が存在し、他方の極に世帯年収の低い不安定労働者層が位置づいていた。世帯年収の高い2つの経営・管理層は他の階層と比べ家族数も少なく、この点で経済条件の格差は現実にはより大きなものとして把握できた。しかも、各階層の経済条件は様々な社会的条件と基本的に結びついていた。とりわけ、安定的経営・管理層の場合、地域への根つき方の弱さと父母の学歴の高さという点で、際だった特徴をもっていた。

II. これに対し、子どもの生活や意識は、学年や性別による差異が大きく見られる領域もあれば、階層による差異に特徴が見られる領域もあった。

① 児童・生徒の生活時間の場合、階層的な差異はそれほど大きなものではなかった。むしろ、彼らの生活時間は学年と性による違いの方が大きく、すべての階層に共通した学年の上昇に伴う睡眠時間や学校拘束時間の男女差の拡大という点にもっとも大きな特徴があった。

② 一方、児童・生徒の学校生活の特徴は、当然のことながら、学年による違いがもっとも大きかった。とくに、それは、学年の上昇に伴って、男女とも学業成績やスポーツに対する自己評価が低下し、成績や進路に悩む者が増加する点に端的に示されていた。

しかし、男女によって異なる傾向や階層的な差異も確実に存在していた。

学業成績に対する肯定的回答率は経営・管理層において相対的に高く、労働者層において低かった。なかでも、安定的経営・管理層および不安定経営・管理層の肯定的回答率の高さは突出していた。これはとくに男子に目につき、ほぼ各学年を通じてつねに高水準を誇っていた。しかし、女子の中でも安定的経営・管理層のように肯定的回答率がそれほど低下しない階層も存在した。その意味で、学業成績における自己評価のあり方には、第1に、明白な男女格差ならびに階層格差があること、第2に、ジェンダー構造と階層構造双方の影響を受け、安定的経営・管理層の女子は男女差をこえるような階層的特徴を示していた。

こうした大きな性差と階層差は、得意科目にも見られ、全体として得意科目と成績の自己評価が密接な関係にあることが見いだされた。しかし、安定的経営・管理層の場合には、必ずしも両者の関係はストレートな形では現れておらず、むしろねじれをともなったものとして把握された。それは、成績の自己評価に、客観的な成績水準と自己肯定感という両義的な側面が含まれていることを物語っている。

しかし、スポーツにおける自己評価のあり方に関しては、たしかに、男子の方が優位にたつ形でのジェンダーによる一定の格差があったが、階層格差は明白には見られなかった。この点で、学業成績に対する自己評価のあり方とは、異なっていた。

学校における集団活動の場合、必修クラブには階層差は存在しなかったが、部活動と児童会・生徒会では、階層によっていくつかの異なる特徴が見いだされた。その中で、とくに特徴的な動きを示していたのが、男子の安定的経営・管理層である。この層の場合、部活動、生徒会とも、中2の段階で「熱心に」参加し活動する者の割合が高く、そのうち、男子には、部活動の部長、児童会・生徒会の役員経験者も、他の階層と比べ多かった。

学校での楽しみのうち、「先生とのふれあい」や「好きな授業をきくこと」といった学校のもっとも基本的な機能に関わる側面に関しても、男女や階層による一定の違いが存在した。そもそも、「先生とのふれあい」や「好きな授業をきくこと」を楽しみとしてあげる者は小5・中2に少なく、主として小3にし

が見られなかった。しかし、小3の中でも男子より女子の方にそうした児童が多く、男女とも他の階層に比べ安定的経営・管理層に多かった。

逆に学校での悩みでは、第1に、男女とも小3段階で安定的経営・管理層に成績を悩みとしてあげる者の割合が他階層と比べ格段に高く、小学校低学年であっても学業成績にとくにこだわりをもつ傾向があること、第2に、小学校段階において、男女とも他の階層に比べ、不安定経営・管理層に「友達」を悩みの内容としてあげる者が多く、とくにこの階層の女子にその傾向が顕著である点に階層的な特徴が見いだされた。

こうして、基本的に学年によって異なる学校生活の中で、安定的経営・管理層の子弟、とりわけ男子に他の階層とは異なる独特の傾向が存在することが明らかになった。それは、一言でいえば、学校生活と学業成績を重視する傾向といえるであろう。しかも、学校の悩みの相談相手として父母をあげる者が多く、その意味で、こうした現実の背後に、父母の存在が少なからぬ影響を与えていたと考えられる。

③子どもたちの放課後の生活には、学年・男女・階層の違いが見られない領域、主として学年の違いが大きい領域、主として男女の違いが大きい領域、一定の階層差が無視できない領域が存在した。

学年・男女・階層の違いが見られなかったのは、家庭教師についている者とボーイスカウト・ガールスカウトへの参加者の少なさであり、外遊び・内遊びの有無、遊びの内容や遊び相手に関することであった。いいかえれば、これらは、現代の子どもたちの世代的な特徴であると考えられる。

学年による変化には、明らかに受験勉強が近づくことによって生じたものと、発達段階の違いによってもたらされたものが存在した。前者は、学年の上昇に伴う通塾者の増加、中学段階での勉強時間と子ども会への参加者の激減という変化の中に典型的に見いだされた。後者は、外遊びの場が学年の上昇に伴って男女とも「ゲームセンター」へ変化すること、外遊びの内容も「ゲーム」、「ぶらぶらする」といったものが中心になること、さらに外遊びの相手として「他クラスの友」が増加し、内遊びでは「一人で遊ぶ」者が増加することなどの中に端的にあらわれていた。

男女による違いは、外遊びや内遊びの内容に顕著に見られた。男子には「野球」、「サッカー」、「ゲーム」をする者が多く、「石けり」、「砂場遊び」、「鬼ごっこ」、「おしゃべりをする」者が女子に多かった。同時に、習い事に通う者の割合やその内容、スポーツ少年団・スポーツ教室へ通う者の割合やその内容にも強い男女差が見られた。このうち、男子の「ゲーム」と女子の「おしゃべり」以外は、学年の上昇に伴って男女とも減少するため、次第に男女差が小さくなっていった。しかし、それ自体、年齢の低い段階で男女別に異なる活動を通して獲得されるジェンダー・ハビトゥスの存在を示すものとして、重要な意味をもっていると考えられる。

放課後の活動として階層差が見られたのは、塾に通う者の割合と習い事に通う者の割合やその内容に関してである。塾に通う者の割合は、主として不安定労働者層の子弟の場合、男女とも一貫して相対的に少なかった。習い事に通う者は、主として安定的経営・管理層に多く、不安定労働者層に少なかった。その傾向は、とくに女子のピアノの場合に顕著であった。こうした現実には、これらの階層の経済資本や文化資本の差によって生み出されたものと思われる。

このように、子どもたちの放課後の生活には、世代的に共通した特徴だけでなく、学年、男女、階層による違いも存在していることが明らかになった。

④児童・生徒の家庭生活の場合、たしかに男女差や階層差が見られる領域があった。家の手伝いのうち掃除や洗濯が女子に偏る傾向が見られ、女子の場合、家庭内のコミュニケーションに「姉妹」が比較的重要な位置を占めていた。そこには、明確な男女差が存在した。同時に、小遣い額が階層ごとに異なり、安定的経営・管理層の小3女子に「本」のために小遣いを使う者が多く、安定的経営・管理層の男女に勉強を介した家庭内のコミュニケーションをとる者が多い点で、階層差も見られた。また、安定的経営・管理層の中2の男女に、「親子の関係」を家庭の悩みとしてあげる者が、他の階層より著しく多いという特徴も見られた。

しかし、こうした男女差、階層差以上に、家庭生活に大きな影響を与えていたのは、学年の違い、とり

わけ小学校段階から中学校段階への移行であった。それは、小遣い、手伝い、家庭内のコミュニケーション、家庭内の楽しみや悩みなど、多くの面で見いだされた。このことは、子どもたちが進学競争に巻き込まれていく過程と発達段階的に見て自立していく過程が重なりながら、生じるものであった。

⑤児童・生徒の将来志向のうち、学歴志向に関しては、明確な男女差と階層差が見られた。学歴志向の男女差は、とくに女子に専門学校や短大を望む者が多い点に現れていた。一方、学歴志向の階層差は、男女、学年を問わず高学歴志向の強い安定的経営・管理層や不安定経営・管理層と、高学歴志向の弱い不安定労働者層と自営業層が存在するという形で把握できた。しかも、その傾向は、学年の上昇に伴ってより強固なものとなっていた。そのため、安定的経営・管理層、不安定経営・管理層は学歴志向について上向きに軌道修正しがちな階層、自営業層、不安定経営層は下向きに軌道修正しがちな階層として、両者の異なる性格が浮かび上がった。

しかし、こうした学歴志向は、学年、男女、階層を問わず職業志向や定住志向とは必ずしも結びついていなかった。したがって、学歴志向は、明確な職業志向や定住志向による将来の具体的な人生設計をふまえた上で、形成されているわけではなく、むしろ、とりあえずの将来像として描かれたものであることが明らかになった。

Ⅲ. 父母の意識や行動の場合、子どもの学年、性別や階層による違いと同時に、父母の間での差異が特徴的な領域もあった。

①父母の教育・地域活動の参加に関しては、いずれの活動にも母親の方が父親よりも強く関わっており、母親の方が父親よりも子どもの学年・階層による違いが小さかった。それは、塾の必要性という点でも見られ、母親の方が強く認識する形で父母の間に一定のずれが存在した。

しかし、それは必ずしも様々な父母の教育観や社会観が同様な傾向をもっていることを意味していなかった。第1に、教育・地域活動の参加や塾の必要性とは異なり、現在の社会が学歴社会だとみなす者の割合が父母ともに変わらず、この点に関して階層差、子どもの学年や性による違いもなかった。それは、社会における成功が、「努力」と「才能」、そして多少の「運」によってきまるという考え方にも同様に見いだされた。第2に、学歴社会観の如何や塾の必要性の如何にかかわらず、子どもが中学生段階になると、階層構造において両極をなす安定的経営・管理層と不安定労働者層の間に、子どもにふさわしいとする勉強時間とTV視聴時間に関する考え方の違いが明確に現れるようになっていた。それは、教育・地域活動の参加や塾の必要性とは異なり、階層差が存在することを意味していた。第3に、教育・地域活動の参加や塾の必要性とは異なり、子育ての担い手に関し、少なくとも理念や期待という点で、多くの父母の間に比較的共通した役割分担の考え方もあった。多くの父母が「学力」、「体力」はもっぱら学校、「生活習慣」、「情操」はもっぱら家庭で形成されるのがふさわしく、「やる気」を育てる場として学校と家庭が二分され、「遊ぶ態度」は学校が主で地域がそれを補う場として認識されていた。

その意味で、父母の教育観や社会観、そして実際の行動は、必ずしも互いに関連し合っておらず、むしろ相互にずれを伴いながら存在していることが明らかになった。

②親の側から子どもとのコミュニケーションのあり方を見ると、一定の学年差は存在したが、性別や階層による違いはあまり見られなかった。むしろ、この点に関して特徴的なのは、父母の間の違いであった。たとえば、全般的に見ると父親より母親の方が子どもと頻繁にコミュニケーションし、コミュニケーションする者が多い項目も父母によって異なっていた。

しかし、親子のコミュニケーションに関しては、親子間の認識のずれがあることも事実であった。大まかにいって、父母ともに親が思っているほど子どもは親とコミュニケーションしているとは考えていなかった。とくに遊びや学校・将来の話をするという点でその傾向が強かった。しかも、これらの点に関して、学年、男女、階層の違いは、一部の点を除いて、見いだされなかった。その中で、大きな階層的特徴として、安定的経営・管理層の父子の間に、子どもの目から見れば「テストの結果」には過剰に関心を示すが、「学校の話」は聞いてくれない、そんな父親像が想起できるような、問題性をはらむ認識のずれが見いだされた。

③父母の学歴期待は子どもがいずれの学年であっても男女によって大きく異なっていた。たしかに、男子に対する学歴期待は女子よりも高かった。同時に父母の学歴期待は男女問わずすべての学年で安定的経営・管理層→不安定経営・管理層ないし安定的労働者層→自営業層→不安定労働者層の順に固定されており、大きな階層差が存在していた。しかし、彼らの学歴期待は、男子の場合、階層の違いなく、学歴志向を上回っていた。一方、職業期待では、男子に対しては、父母ともに公務事務、管理的職業、教員がいずれの学年とも上位を占め、階層別に見ると、とくに父親の場合、自らの社会的地位の再生産につながるような職業期待をする傾向が見られた。しかし、女子に対する職業期待は父母の間で異なっていた。父親は階層の違いなく公務事務、教員、一般事務、保母を望んでいた。しかし、母親はいずれの階層でも保母、看護婦、教員といった専門職を期待する者が父親より多かった。その意味で、学歴期待に関しては階層差を伴う子どもの性差が大きな影響を与え、職業期待に関しては階層差も含めて子どもと親の二重の性差が少なからぬ影響を及ぼしていたことが明らかになった。

Ⅳ.以上の点をふまえ、親子の生活・意識における階層差のあり方に焦点を合わせて、改めてまとめ直すと以下のごとくならう。

児童・生徒の社会経済的背景には明確な階層差があった。しかし、親子とも生活や意識に関して構造的に一貫した階層差は明確な形では見いだされなかった。それぞれの階層は独自の客観的条件をもっているにもかかわらず、子どもたちの生活や意識を貫く階層ごとの構造的差異は見られなかった。親の意識に関しても、階層ごとにまったく異なる形をとってはいなかった。そこでは、むしろ、子どもの学年の違いや男女差、また父母の違いの方が大きな意味をもっていた。

だからといって、親子の生活や意識に階層による違いがまったく存在しなかったわけではない。階層による違いは、一貫した構造としてではなく、いくつかの限られた領域に点在する形をとっていた。とくに、成績の自己評価、学校へのコミットの仕方、勉強を介した親子のコミュニケーション、親の学歴期待、子の学歴志向などといった勉強や学校に関わる生活や意識の領域の一部に特化する形で、明確な階層差が見いだされた。親子の生活や意識は階層による構造的差異を示していなかったが、勉強や学校に関わる領域の一部に限定する形でいくつかの階層的差異が存在したのである。逆にいえば、それ以外の領域、とくに勉強や学校に直接関わらない領域では、親子の生活や意識には、階層による差異は見だしにくかったということである。それは、一方で、階層的な差異は全体として見えにくくなっていること、しかし、他方で、勉強や学校に関わる領域だけは、親子とも階層的な差異が見えやすい形で存在していることを物語っている（この点に関しては、補論も参照）。

その際、勉強や学校に関わる領域の一部で見られた階層的な差異は、多くの場合、安定的経営・管理層と不安定労働者層が両極に位置する形をとっていた。とくに親の学歴期待や子どもの学歴志向には、階層ごとの差異が明確に見いだされた。安定的経営・管理層の子どもたちの多くは成績の自己評価が高く、積極的に学校へコミットし、学歴志向が高かった。親の学歴期待は子どもの学歴志向以上に高く、勉強を介した親子のコミュニケーションも重視されていた。そこには、勉強や学校に対して積極的な姿が強く現れていた。逆に、不安定労働者層の親子は、安定的経営・管理層の親子とは対照的な姿を示すことが多かった。

しかし、安定的経営・管理層と不安定労働者層以外の諸階層の場合、親の学歴期待と子どもの学歴志向を除くと、学校や勉強に関わる領域であっても必ずしも一定の位置を占めてはいなかった。ある面では安定的経営・管理層と同様に勉強や学校に積極的な姿を示すが、他の面ではそうでないことも少なくなかった。これらの諸階層の場合、それぞれの階層的な違いは勉強や学校に関わる領域であっても、それほど明確ではなかった。さらに、安定的経営・管理層の対極に位置する不安定労働者層の場合でさえ、学年によって多少異なる傾向を見せたり、男女による違いの方が大きな意味をもつこともあった。

その中であって、安定的経営・管理層だけは、少なくとも勉強や学校に関する領域では、他の諸階層とは大きく異なる特徴を持っていた。その上、勉強や学校に対する積極的な姿勢は、この階層の親子の場合、ほぼいずれの学年でも見られ、男女による違いも他階層と比べそれほど大きくなかった。その意味で、安

定的経営・管理層の親子は、学年や男女の違いに関係なく、勉強や学校に対する積極的な姿勢をもっているという点で、独自の特徴をもっていた。

しかし、こうした安定的経営・管理層の勉強や学校に対する積極的な姿勢の中で、子どもたちがプレッシャーを増大させていた姿も垣間見られた。学業成績の自己評価が高いにもかかわらず、それに満足する自己肯定的な姿は見られず、得意科目は多くなく、成績や進路に対する悩みが大きかった。勉強を介した親子のコミュニケーションが重視されていた現実の中で、この階層の中2の男女に「親子の関係」に悩む者が多かった。したがって、安定的経営・管理層の親子に見られた勉強や学校に対する積極的な姿勢は、子どもに対するプレッシャーの増大を伴う形で存在していたといえる。その意味で、この点でも、安定的経営・管理層の場合、他の階層とは大きく異なる特徴をもっていた。

こうして、①階層的な差異は親子の生活・意識に一貫する構造的な形ではなく、勉強・学校に関わる領域の一部に特化した形であらわれていたこと、②その差異は所得や学歴といった社会的経済的条件に恵まれた安定的経営・管理層とそうでない不安定労働者層を両極にした形で把握できたこと、③それ以外の諸階層は、勉強・学校に関わる領域に関してさえも、必ずしも一定の位置を示していなかったこと、④その中であって、安定的経営・管理層の勉強や学校に対する積極的な姿勢が突出し、それによってこの階層の子どもたちのプレッシャーが増大していたことが明らかになった。いいかえれば、これらの諸点に、現段階における教育を媒介にした社会的再生産過程の特質があるといえる。

だが、こうした現実があるにもかかわらず、多くの親が階層の違いなく、社会における成功は「努力」と「才能」、そして多少の「運」によって決まるというメリトクラティックな考え方ももっていたことにも注目しておく必要がある。なぜなら、勉強・学校に関わる領域の一部で見られた階層差を通して教育を媒介にした社会的再生産が実現したとしても、それは決して不当なことではなく、「努力」と「才能」、そして多少の「運」によって生み出された結果であるとして、現実が受けとめられることになるからである。その意味で、階層差が勉強や学校に関わる領域の一部に限定され、階層による独自性が特定の階層にのみ強く見られたという階層的差異の限定性と、階層を超えて幅広く見られた親のメリトクラティックな考え方が、現実に進展している教育を媒介にした社会的再生産過程を「正当化」する機能を果たしていると考えられる。

以上の点をふまえると、現実に進展している教育を媒介にした社会的再生産過程は、直接的には親の教育に対する姿勢の違い、とりわけ特定の階層の積極的な姿勢によって生み出されるものであることが明らかになる。それは、親の経済資本や文化資本といった客観的な条件によって、子どもの学歴水準が直接的に規定されるものではなく、その意味では、教育の階層的再生産が宿命的なものであるとは必ずしもいいきれないことを物語っている。

しかし、こうした事実は、経済資本や文化資本といった客観的条件の違いが、教育を媒介にした社会的再生産過程にとって影響力をもたないことを意味していない点にも注意する必要がある。特定の階層の教育に対する積極的な姿勢が特定の客観的な条件の下でのみ初めて生じると考えることも可能だからである。実際、安定的経営・管理層に特有の教育に対する親の姿勢は、彼らが所有する経済資本や文化資本に起因するという理解もなりたつ。その意味では、親の教育に対する姿勢と彼らが所有する経済資本や文化資本といった客観的条件との関連性をより詳細に検討する必要がある。

だが、いずれにしても、ここで明らかになった事実は、親の教育に対する姿勢によって教育を媒介にした社会的再生産過程が変わりうるものであるという点を示しているといえる。しかも、それは、親たちの成功観にも明確に現れていた。

ただし、教育に対する積極的な姿勢を親がもつことは、安定的経営・管理層に見られたように、子どもに対するプレッシャーの増大にもつながる点を忘れてはならない。しかも、経済資本、文化資本に恵まれない他の諸階層が教育に対する積極的な姿勢をもった時、子どもに対するプレッシャーはより大きくなることも考えられる。同時に、すべての階層が教育に積極的な姿勢をもてば、一方で、教育をめぐる競争はよりいっそう激化し、別の問題が深刻化することになり、他方で、その時こそ、客観的な条件の違いがよ

りいっそう重要な意味をもつことが表面化することになるであろう。したがって、それぞれの階層が自らの客観的条件の違いを乗り越え、教育に積極的な姿勢を持てば、それで問題が解決すると考えるのは早計である。

その意味で、ここで明らかにした現実には、教育を媒介にした世代的再生産過程の一端を明らかにし、それを通してその過程を克服する一つの手がかりを提供するが、それには一定の限界があることを示している。いいかえれば、教育の問題だけに焦点をしばって議論することには、大きな限界があるということである。その際、重要な意味をもつのは、生活条件の階層間格差と社会的不平等の大きさの問題である。なぜなら、教育を媒介にした世代的再生産過程が問題になるのは、階層の世代的再生産それ自体に原因があるのではなく、階層間に大きな生活条件の格差や不平等が存在するからである。逆にいえば、たとえ教育を媒介にした世代的再生産のあり方が克服されたとしても、階層間の格差が大きければ、より条件の良い階層的地位の達成をめざして、教育をはじめとする様々な手段を通じた低年齢からの熾烈な競争が続くからである。そのため、そこでは、親の姿勢や考え方を変えることによって、教育を媒介にした世代的再生産過程を解決する方向だけでなく、少なくとも生活水準の全体的な底上げを計りながら社会構造のあり方を階層的な格差が少なくなる方向で社会構造そのものを是正していくことが必要になると考える。

だが、事態はむしろ逆の方向で推移しているのが現実である。現実の社会は、失業者の増大と階層間格差の拡大を伴う、大競争時代に突入しつつある。それだけに、本報告書で浮き彫りになった事実とそれをふまえたここでの提起は、重要な視点として少なからぬ意味をもつと考える。